

課題名

26. ハウスミカン園の実態

成果概要

県下 241 のハウスミカン園について平成元年 6 ～ 7 月の葉中無機成分及び土壌の化学性を調査した。

(1) 土壌の化学性では、露地ミカン園の土壌診断基準と比べて全般に土壌 pH が低く交換性カリ含量が多い傾向がみられた。また、葉分析では窒素含有率がやや高く、リン酸と亜鉛含有率がやや低い傾向がみられた。

(2) 被覆年数の増加に伴って、土壌の電気伝導率、有効態リン酸含量交換性カリ及びカルシウム含量がやや高くなる傾向がみられたが、その傾向は比較的小さかった。被覆年数と葉中成分との間には、一定の傾向が認められなかった。(表 1)。

(3) 果実肥大後期から多くみられる果頂部の裂果症状の発生と葉中成分組成との関係を見ると、発生園の葉中カリ、マンガン含有率が春枝利用型、夏枝利用型のいずれでも低い値を示していた(表 2、図 1)。

(4) 火ぶくれ様の果面黄斑症が多発する園地では、果実中及び葉中のホウ素含有率が低い傾向がみられた(図 2)。

表 1 ハウスミカンの被覆年数と土壌化学性の変化

歴 年	pH(H ₂ O)	pH(KCl)	E C	CaO	Mg O	K ₂ O	P ₂ O ₅
			(mS/cm)		(me/100g)		(mg/100g)
1 (39)	5.36	4.53	0.226	7.98	2.31	1.31	74.5
2 (18)	5.46	4.67	0.208	8.30	2.02	1.51	65.0
3 (19)	5.59	4.93	0.289	7.91	2.29	1.59	116.3
4 (27)	5.34	4.71	0.320	7.49	2.36	1.70	77.1
5 (22)	5.53	4.87	0.357	8.99	2.42	1.88	121.0
6 (27)	5.23	4.61	0.371	8.40	2.26	1.61	112.9
7～9 (22)	5.30	4.58	0.304	8.17	2.02	1.77	149.9
10～ (13)	5.03	4.39	0.412	8.66	2.22	2.04	135.2

注) () 内は調査園数

要

表2 果実障害発生の有無と葉中成分含有率

(対乾物比)

障 害	N	P	K	Ca	Mg	Mn	Zn	Fe	Cu	B
果面黄斑症(18)	3.09	0.148	1.07	2.95	0.371	64.7	21.3	82.5	4.93	52.3
裂果 A (7)	3.13	0.166	0.86	3.40	0.350	49.6	28.6	72.6	8.45	67.8
裂果 B (5)	2.91	0.121	0.70	3.03	0.327	77.7	22.2	89.0	6.17	61.5
障害無 A (162)	3.15	0.145	1.21	2.95	0.350	67.5	22.3	79.5	5.32	60.3
障害無 B (7)	3.01	0.135	0.89	3.31	0.297	101.7	27.5	75.2	5.96	68.2

注) () 内は調査園数 Aは春枝利用型、Bは夏枝利用型

成

績

概

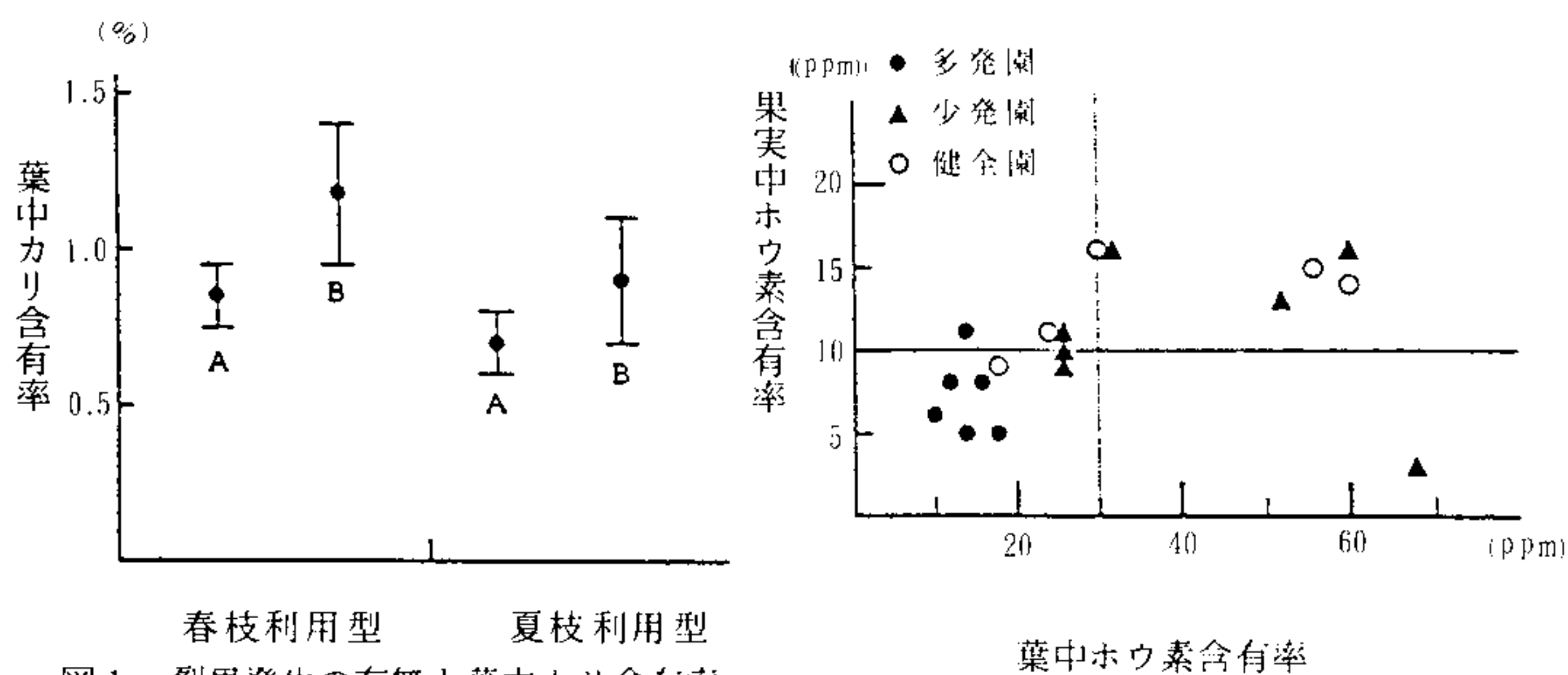


図1 裂果発生の有無と葉中カリ含有率
A: 裂果多発園 B: 健全園

図2 果面黄斑の発生程度と樹体ホウ素含有率

(果樹試験場)

普及上の留意点